ディアスポラの内面心理——日本語と日本女性に向かう情熱

南富鎭 NAM Bu-jin
静岡大学 *Shizuoka University*

1．ディアスポラの内面風景

たとえば、一九六〇年代から一九八〇年代に韓国で青春を送った人なら誰もがもつ思春期の淡い恋の情景がある。高等学校の国語教科書に載っている皮千得「因縁」という作品のことである（第四次、第五次国定教科書、一九七五年～一九九〇年）。最近、「因縁」は『読み直す国語』（知識工作所、二〇〇二年）にも再録され、韓国人の懐かしい青春時代の原風景にもなりつつある。それは次のような感傷的な話で綴られている。

春川の聖心女子大学の英文科で出講している〈私〉は「聖心」という言葉に数十年前の日本留学時を思い出す。〈私〉は東京芝区のM先生宅に下宿していたが、そこには聖心女学院一年生の朝子というとても可愛い小学生がいた。朝子はよくなつき、〈私〉が帰国する時には使い古した自分のハンカチと指輪をプレゼントしてくれた。その後、十三四年ほど経って〈私〉は二度目に東京に行った。その時に朝子は聖心女学院英文科三年生になっていた。久しぶりの再会に二人は夜遅くまで文学を語り、別れの時には軽い握手を交わした。朝子との三度目の再会は戦後十年ほど経った一九五四年、アメリカに行く途中であった。朝子はすでに日系二世のアメリカ人将校と結婚していた。〈私〉は朝子が日系二世と結婚したことにいたく失望する。また萎れていく百合のような彼女の姿に心を痛める。

数十年前の昔、小学生の朝子に絵本をプレゼントした時、表紙を飾った尖った屋根の洋風の家を見て朝子は、「ああ、綺麗だわ、いつかこんな家で一緒に暮らしましょう」と言ったのである。もしも戦争が十年くらい早く終わり、韓国がそれだけ早く独立したら「朝子の言葉のとおり私たちは同じ家で暮らせたかも知れない」と、〈私〉は心秘かに思った。しかし今は、三度目の朝子には会わなければよかったと〈私〉は思う。

韓国の「随筆の天才」という名をほしいままにした皮千得ならではの、感

傷的な色彩で綴られた作品である。絵本のような洋風の家で日本女性と暮らす情景は、当時の思春期の少年たちにはとにかく幻想的な恋の憧憬であった。しかし、日本女性との結婚の意味についても、あるいは作中にある日系二世に対する差別的表現についても当時にはなにも教わることはなかった。「日本人でもなくアメリカ人でもない」日系二世と朝子の結婚に失望したならば、はたして朝子と〈私〉との結婚は大丈夫だろうか、あるいは〈私〉と朝子の結婚生活は日本で日本語でなされるのだろうか、といった疑問を抱くこともなかった。

もう一つ、最近の話題作で在日朝鮮人を扱った『ＧＯ』という小説がある。作者は在日三世の金城一紀、作品は二〇〇〇年の一二三回直木賞受賞作に選ばれ、翌年の二〇〇一年には行定勲監督、窪塚洋介主演で映画化された。内容は至極簡単である。

在日朝鮮人の〈僕〉（日本名、杉原）は日本人女子高校生櫻井椿と愛しあっていたが、自分が在日朝鮮人であることを彼女には隠していた。しかし、二人がいよいよ結ばれるホテルで、〈僕〉は彼女に自分の出自を告白する。それに櫻井は驚き、さらに父親の強い反対もあって二人の関係は一時破綻する。しかし、しばらく経ってから彼女は〈僕〉の出自に理解を示し、二人は以前の関係を取り戻すことになる。そして二人は堅く手を握りあって、題目のとおり、「行きましょう（ＧＯ）」と言いながら夜の街にくり出す。二人が堅く結ばれることが暗示されることで作品は終わる。そして作品と映画では、印象的な場面として〈僕〉と父との壮絶な決闘シーンがあり、韓国のホテルで在日を侮蔑した韓国人運転手を〈僕〉が打ちのめす過激な場面などがある。朝鮮人でも韓国人でもなく、いわゆる在日としての自己発見のようなものがあり、それが日本女性と結ばれる動因になっていくのである。朝鮮人と韓国人との距離の設定によって日本女性との恋愛が担保されることになるのだろうか。しかし、作品では最後までどこに向かって「行きましょう（ＧＯ）」なのか、〈ＧＯ〉の行き先に何が待っているのか、何一つ提示されてない。

とくに近年『ＧＯ』に類似するものが氾濫しているが、朝鮮人と日本人の恋愛や結婚は幻想的または浪漫的なストーリとして、教科書・小説・映画・ドラマなどで繰り返し反復されてきたテーマである。明治期から繰り返してきたいわゆる内鮮恋愛と内鮮結婚の歴史的なテーマであるが、そこにはいつも日本語が介在し、その方向は必ずといっていいほど日本側に収斂していく。内鮮恋愛・内鮮結婚（戦後では日韓・日朝国際結婚）によって日韓の男女が結ばれ、それが「因縁」や『ＧＯ』に見るように、終局的には朝鮮を離れて日本側に接近していくのである。つまり、内鮮恋愛や内鮮結婚（日韓・日朝国際結婚）の言説には朝鮮人のディアスポラがつよく胚胎されているのであ

る。

以下本論では、日本女性と日本語への欲望を通して朝鮮人が日本化していくディアスポラの内面心理を浮き彫りにするため、内鮮恋愛や内鮮結婚に注目する。

2．日本女性への欲望

日本人と朝鮮人によるいわゆる内鮮結婚と内鮮恋愛は、明治中期から始まり、以降ますます多様化してきた言説である。明治期には支配と被支配による政治的表象として、大正期にはプロレタリア運動の同志愛的な存在として描かれ、昭和期には一層多様な側面として溢れてくる。とくに昭和期になると内鮮結婚の増加と植民地の政策的必要性から多様化していくが、なかでも満州事変以降に顕著に現れるのが内鮮一体という国策的な時代風潮にともなう内鮮結婚への大衆的な憧れである。日本女性（日本男性）に対する強い欲望を示す作品が日韓において多く書かれることになる。たとえば、蔡万植「痴叔」（朝鮮語、一九三八年）には次のような欲望が露わに表出されている。

> それに家の大将も言っているし、私はとにかく内地人の女性と結婚したいですね。大将がいい嫁を見つけてくれるといってました。内地の女性はいいですね。
>
> 私は朝鮮の女はただで持っていけと言ってもいやですね。
>
> 旧式の女はおとなしい分別がないので内地人との交際に悪いし、新式の女性は分別はあるが生意気だから全く駄目だし、とにかく朝鮮の女は新式でも旧式でも全部いやですね。
>
> 内地の女性は本当にいいな。揃いも揃って顔は綺麗だし、おとなしいし、優しいし、知識があっても生意気でないし、本当に文句がないね。
>
> 内地の女性と結婚しちゃえば、名前なんかも内地式に変えて、内地式の家に住み、内地の着物を着て、ご飯も内地式に食べて、子供たちの名前も内地式に変え内地人の学校に通わせて……
>
> 学校はやっぱり内地人の学校じゃなくちゃ。朝鮮人の学校は汚いし、子供はすぐ不良になるし。
>
> それから私も朝鮮語なんかはすっかり止めて国語だけにしたいね。

風刺的に描かれた作品は、叔父の思想と行動を貴いものとし、甥の存在を

強く批判する構造になっているが、またそこには日本女性と日本語へ傾斜していく植民地の時代風潮がみごとに捉えられている。日本女性への傾斜が日本語への傾斜をもたらし、それが総体的に朝鮮人から日本人への傾斜に結びつく。こうした日本女性（日本男性）への傾斜を描いた文学言説はその数が実に多い。以下、内鮮恋愛や内鮮結婚の問題が扱われた作品を挙げていく。

（〜一九四五年まで）

李孝石「薊の章」（日本語、一九四一）、階戸義雄「鉄格子の中に」（日本語、一九四一）、林和「雨傘の中の横浜埠頭」（朝鮮語、一九二九年）、与謝野鉄幹「観戦詩人」（日本語、一九〇四年）、与謝野鉄幹「東西南北」（日本語、一八九六）、半井桃水「朝鮮釜山戯話」（日本語、一八八一年）、半井桃水「胡砂吹く風」（日本語、一八九一年）、服部徹「小説東学党」（日本語、一八九四年）、李人稙「貧鮮郎の日美人」（朝鮮語、一九一二年）、湯浅克衛「棗」（日本語、一九三七年）、湯浅克衛「カンナニ」（日本語、一九三五年）、葵イツ子「相違の日」（日本語、一九二六年）、鄭人沢「殻」（日本語、一九四二年）、尹白南「口笛」（日本語、一九三二年）、廉想渉「南忠緒」（朝鮮語、一九二七年）、李光洙「かれらの恋」（日本語、一九四一年）、李光洙「少女の告白」（日本語、一九四四年）、金聖珉「緑旗連盟」（日本語、一九四〇年）、金聖珉「天上物語」（日本語、一九四一年）、金聖珉「恵蓮物語」（日本語、一九四一年）、金聖珉「楓の挿話」（日本語、一九四〇年）、島村利正「高麗人」（日本語、一九四一年）、飯島正・日夏英太郎「君と僕」（日本語、一九四一年）、蔡萬植「女人戦紀」（朝鮮語、一九四五年）、石川達三「鳳青華」（日本語、一九三八年）、李光洙「血書」（朝鮮語、一九二四年）、韓雪野「影」（日本語、一九四二年）、韓雪野「血」（日本語、一九四二年）、青木洪「妻の故郷」（日本語、一九四二年）、鄭人沢「扶桑館の春」（日本語、一九四一年）、趙容萬「森君夫婦と僕と」（日本語、一九四二年）、金史良「光の中に」（日本語、一九三九年）、金史良「光冥」（日本語、一九四二年）、金士永「兄弟」（日本語、一九四二年）、林庸均「春の嵐」（日本語、一九四二年）崔貞熙「野菊抄」（日本語、一九四二年）、久保田進男「連絡船」（日本語、一九四二年）、廉想渉「万歳前」（朝鮮語、一九二四年）、張赫宙「憂愁人生」（日本語、一九三七年）、張赫宙「雰囲気」（日本語、一九三八年）、張赫宙「美しき結婚」（一九三九年）、牧洋「血縁」（日本語、一九四三年）、趙一済「長恨夢」（朝鮮語、一九一三年）、李孝石「銀の鱒」（朝鮮語、一九三九）、呉本篤彦「虧月」（日本語、一九四四年）、李燦「歳月」（朝鮮語、一九四三年）、金龍済「東京恋愛」（朝鮮語、一九三七年）、白信愛「混冥から」（朝鮮語、一九三九年）、兪鎭午「秋」（朝鮮語、一九三九年）、安東緑江「母を呼ぶ梵鐘」

（日本語、一九二八年）、李孝石「緑の塔」（日本語、一九四〇年）、高東馬「恩讐を超えて」（『キング』一九三三年）

以上、明治期から昭和の戦前までの内鮮恋愛・内鮮恋愛の主な文学言説を取り上げたが、政治・社会的な言説を含めるとその数は実に膨大であるといえる。内鮮結婚・内鮮恋愛を扱ったこうした言説は、多くの場合、朝鮮人のディアスポラの内面心理が覗かれる。たとえば、金史良「光の中に」では日本人の父親（山田半兵衛、彼自身も日韓混血児である）と朝鮮人の母親に生まれた山田少年が、暴力的な父を肯定し、愛情を感じながらも朝鮮人母の存在を否定している。つまり日本人への限りない追随と朝鮮人への限りない軽蔑を見せている。同じく金史良「光冥」（一九四一年）では朝鮮人男性と日本人女性の間に生まれた娘が朝鮮のことを軽蔑して朝鮮人女中を散々虐める。湯浅克衛「棗」（一九三七年）の金太郎（混血児）は自分を捨てた母に淡い愛情を感じ、彼自身は養子縁組により日本籍を得ている。さらに張赫宙「憂愁人生」（一九三七年）の〈私〉は、朝鮮人父親とその同僚に「異様な体臭も顔も音声にも毛嫌ひを感じ」たりする。同じく張赫宙「雰囲気」（一九三八年）の女主人公鈴与は「朝鮮人嫌ひ」で、朝鮮人の「自分の父もとても憎んで」いるという。このように、内鮮結婚によって生まれた二世（混血児）はほとんどの場合に日本へ傾斜していき、その反動として朝鮮的なものを軽蔑し、それから離反しようとする。そうした側面は、「雰囲気」とほぼ同じような設定になっている廉想渉『万歳前』の中でも具体的に見ることができる。

『万歳前』（一九二四年）は廉想渉の代表的な長篇小説で、三・一万歳運動以前の朝鮮を描いたものである。主人公の李寅華が妻の最後を見届けるために朝鮮に戻るが、そこで「墓地」のような朝鮮の植民地的現実に辟易し、日本女性の静子が待っている東京に戻ってくる内容である。そして作品には釜山に着いた李がうどん屋の女性従業員たちと長話をする場面がある。

李は釜山に着いて駅近くのうどん屋に立ち寄り、三四人の日本女性に囲まれて酒を飲む。その中に「ちょっと浮いて」他の従業員から虐められている女性がいた。日本人男性と朝鮮人女性の間に生まれた女性である。話によると、彼女が九歳か十歳の時に父が日本に戻り、母はいま一人で大邱に住んでいるという。彼女は連絡がまったく途絶えた父を捜しに長崎に行きたい一念で、母親を捨てて家を飛び出してきたというのである。それに主人公の李は思う。

朝鮮人の母親に育ててもらって大きくなりながらも、朝鮮語よりは

> 日本語を話し、朝鮮服より日本の着物を着て、娘として生まれながら朝鮮人の母親よりは日本人の父親を訪ねて行くつもりだというのは、父母に対する子としての情理を超えたある種の利害関係や一種の趨勢という打算が先立つために、別れてからすでに七、八年にもなるという父親をあてどもなく訪ねて行こうとしているのだと思う時、この子の運勢がかわいそうだということより、その母親をより一層哀れに思わざるをえなかった。

彼女は日本人の父親に盲目的に追随し、朝鮮の母親人から離反しようとする。金史良「光の中に」の山田少年と同じような心情である。こうした盲目的な日本への傾斜と朝鮮的なものからの離反に、主人公は「情理を超えたある種の利害関係や一種の趨勢という打算」と見てとり、彼女を諭して金持ちの朝鮮人と結婚するように勧める。それに対し彼女は、

> 「ええ、でも朝鮮人は私、嫌いなんです。お金じゃなくて金(キン)をくれても嫌なの。」
> 娘は真顔で答えた。朝鮮という二文字は自分の運命に暗い影を投げかける何かの呪文でも聞くように虫ずが走るらしかった。この時、私は東京の静子を思いながら、「じゃ、俺も失格だな。」と言って笑った。

と、朝鮮人への嫌悪を露わにする。それに〈私〉は東京にいる静子と自分との内鮮恋愛を改めて思い浮かべる。この後、〈私〉は妻の葬式を終え、なにもかもが厭になった朝鮮を一刻も早く離れ、静子が待っている東京に戻ることで小説は終わる。このように、『万歳前』では内鮮結婚によって生まれた二世が、あるいは〈私〉が日本的なものに強く傾斜している。日本へ傾斜する二世の心情は日本生まれか、朝鮮生まれかに関わらず、あるいは両親のどちらが何人であるかという家族構成にも関わらず見られる現象である。その背後には差別への反動という側面があり、周りの差別が強ければ強いほど、そうした傾斜と嫌悪が激しく現れているように思われる。また一方では、内鮮恋愛・内鮮結婚への欲望が鬱屈したかたちで表れる場合もある。金聖珉「恵蓮物語」「天上物語」などにそれを見ることができる。

金聖珉「恵蓮物語」(一九四一年)は、昔愛し合った日本女性(樟子)が今は朝鮮女性と結婚している朝鮮男性に告白する形式の入子構造の作品である。ある日、かつて愛しあった樟子が満州に行く途中で〈私〉を訪ね、「恵蓮の物語」を始める。その話はこうである。話の中の主人公である朝鮮人の李奎澤は、妻(恵蓮)をこよなく愛していたが、妻は教育を受けておらず日

本語が話せない。それを過剰に気にしていた〈私〉は、日本語を勉強させるため、妻をむりやりに日本人のマダムが経営するカフェに就職させる。その妻に日本語を教えたのが樟子である。恵蓮は夫の愛情を取り戻すために樟子や日本人の客を相手に一生懸命に日本語を勉強する。それを夫の李は二人の関係を隠したまま週に何遍もその様子を見にくる。そうしたなかで、夫の李は日本女性の樟子と相思相愛の関係になってしまう。恵蓮は二人の関係に疑心暗鬼し、事情を知らない樟子は恵蓮を恋敵と嫉妬し、たくらんで彼女を堕落させる。自棄になった恵蓮の行為がさらに夫を刺激し、二人はついに別れることになる。そして話は現時点に戻り、樟子は〈私〉にこうした自分の恋愛話を語り終え、満州に旅立つという内容である。

概要からも窺えるように、作品では内鮮恋愛に対する主人公の欲望が執拗に現れている。李が恵蓮の無学を悩み、日本語学習のために彼女をカフェへ就職させたのは、恵蓮に日本女性的なものを要求したからである。朝鮮語の読み書きはどうでもよく、ひたすら日本語で話すことを要求し、わざと日本人の居住区で暮らしたことも恵蓮に日本人的な教養と資質を要求したからであろう。内鮮結婚を夢見る心地から李は恵蓮を日本人に改造しようとまでしたのである。恵蓮に対する人間改造にも近い李の努力は日本女性に対する憧憬と内鮮結婚への幻想的な願望が生みだしたものといえよう。そうした李の屈折した心情は次のような態度にもよく現れている。ホテルに入る前、李と恵蓮は次のような会話を交わす。

「しかし、ボーイは何とみるだらう。」
「愛の逃避行。」
「ささやくやうにいつた」
「いや、さうはみまい。お前はれつきとした貴婦人だから—俺は、さうすると、内地人だといふことにしよう。」
「ぢや、あたくしも。——」
「お前は、駄目だ。お前は、服装もいいし、朝鮮人だといつた方がかへつて格がつく。——それで、二人一しょに行けば内鮮一体だ。」
「名前は、——」
「たからべけいのすけ。」
「タカラベケイスケ？」
「財産家だ。——」

李と恵蓮はそれぞれの一方が日本人になりすまし、疑似の内鮮恋愛を演出する。夫婦としては考えられない行動であるが、その背後には内鮮結婚への

鬱屈した欲望が存在しているといえる。同様の心情は金聖珉「天上物語」にも一貫して見られる。

『緑旗』に連載された「天上物語」（一九四一年）は、字の読めない朝鮮人女性と結婚した田舎の駅員の〈私〉が、交換手の日本女性、日本の女流詩人、鉄道局勤務の日本女性へと、次から次へ惹かれていく話である。主人公〈私〉は親の強引な勧めで妻と結婚したが、妻は無学の人で日本語がまったく理解できない。そうした妻の無学に〈私〉は様々に妻の教育を試みるが、妻の非協力で〈私〉の努力は悉く失敗する。それに落胆した〈私〉は日本女性への憧憬から鉄道局の交換手に密かに恋情をいだく。また謎の日本女性から勧められ、鉄道の機関紙に日本語で作品を発表し、それが一等作として選ばれたりする。さっそく二人は文通を開始し、一種の相思相愛の関係となり、彼女が〈私〉を訪ねてくる。同時に〈私〉は自分の文学的な才能に共感する日本人の女流詩人相良志智子へ恋情をいだいていく。文通を通して二人は芸術的に刺激しあい、彼女に対する〈私〉の恋情はますます募る。それがこうじてついに〈私〉は鉄道局の駅員をやめて上京（東京）することを決心する。そこで作品の連載が中断するが、主人公はこれから東京に行って女流詩人に会うことになる、と予告されている。

このように、「天上物語」では朝鮮人の〈私〉はすでに朝鮮女性と結婚しているにも拘わらず、次から次へ日本女性に惹かれていく。日本女性に憧れている朝鮮人男性の鬱屈した心情が、金聖珉の作品には彼自身の精神内部を覗かせるように、随所に見られている。「恵蓮物語」「天上物語」などに見られる主人公の朝鮮人妻への過剰な日本語教育、または家庭内での日本語会話の強要などは、日本女性への欲望がもたらした変質的な側面といえよう。朝鮮人妻を日本女性として再教育することによって代償的に得られる内鮮結婚の疑似体験である。それはある種、朝鮮人から日本人に向かう果てしない欲望のようにも思われる。そうした内面の欲望が朝鮮人ディアスポラの一側面をなしているように思われる。

3．日本語への欲望

内鮮恋愛・内鮮結婚に向かう欲望は、その当然の成り行きとして日本語を要求する。内鮮恋愛・内鮮結婚への欲望が日本語への欲望を促すのである。また日本語への欲望によって内鮮恋愛・内鮮結婚の願望が確保されることにもなる。こうした欲望の一端はすでに紹介した蔡万植「痴叔」に見ることができる。

いったい朝鮮人は雑誌ひとつ作っても、なんであんなものしか作れないんだ。
写真もなければ、漫画もない。
しかも難しい漢字ばかり埋め込んで、いったいだれに読めといんだ。
しかも、私みたいな者には、諺文（ハングル）はどうにか読めるが、理解するのが至難でね。
それにやっかいな諺文と難解な漢字混じりの文章などは、意味がさっぱり分からないよ。諺文で書かれたものといえば小説のたぐいだけど、あれは読むのもしんどいし、なんせ朝鮮人が書いた小説は面白くないからね。私は朝鮮の新聞や雑誌とはとくに縁を切っているよ。
雑誌といえば、『キング』や『少年倶楽部』にでるものがないね。本当にすばらしいよ。
――〔中略〕――
どうせ雑誌を作るならそんなものを作らないと、チッ、朝鮮人はいい加減なホラばかり吹いてろくな雑誌ひとつ作れないんだから。

普通学校卒の〈私〉は、『キング』と『少年倶楽部』を読み、将来的には日本人女性と結婚し、子供は日本人学校に通わせたいと思う。日本語と日本女性へ向かう情熱であるが、〈私〉が日本語に傾斜する理由の一つが、朝鮮語の小説は「読むのもしんどい」し、「面白くない」ということである。日本語教育がもたらした結果でもあるといえよう。こうした日本語への欲望の側面は前述の金聖珉『緑旗連盟』「恵蓮物語」「天上物語」などの作品でもよく見ることができる。

たとえば、『緑旗連盟』では東京で暮らしている三人兄弟の南明哲、明姫、明洙は、普段の生活の中でも日本語を使用している。南明姫は日本語で手紙を書き、日本文に合わせて名前も明子で署名する。また彼女は普段の電話口でも便宜のために南（みなみ）を名乗り、最終的には小松原保重と結婚することになる。日本語で日常生活をし、日本名を名乗る過程の中で内鮮恋愛と内鮮結婚が前提されていくのである。

同様に、陸軍少尉として京城に赴任した金明哲は、小松原保子との恋愛が深まるなか、面会に来た兄の明燁と次のようなやりとりをする。

「なかなか、軍服がよく似合ふよ。軍隊は面白いか。」
明哲は、兄の押しつけてくるやうな朝鮮語に、すこし当惑した顔をして、
「兄さん、すみませんが一つ、内地語で話してくれませんか。」

と言つた。
明燁は、不思議な顔をして、
「お前は、朝鮮語がわからないのか。」
「ですが、ここは連隊のなかですから。——」
「連隊のなかでは、朝鮮語を話してはいかんのか。」
明哲は、兄の顔をちよつとみて、黙つた。
「お前の方で、朝鮮語を話すのが礼儀だと俺はおもふんだが。——それに、俺はどうも、日本語はうまく話せんよ。」
「……」
「しかし、お前ももう、朝鮮語はわからなくなつてきたらうから、誰か通訳するものでも、さういつて来ようぢやないか。」

それで仕方なく南明哲は朝鮮語で話すことになるが、五年あまりも朝鮮語を口にしたことがないのでうまく話せず、口ごもってしまう。それを兄の明燁は皮肉る。

「お前も朝鮮語を忘れるやうになつたのでは、そろそろ一人前にちかいよ。その上、内地人の細君でも貰へば、もう立派なもんだ。」
明哲はいく分反抗的に、さうしようと考へてゐます、と言つた。
「さうしたがいい、さうしたがいい。」
明燁は笑ひながら、
「さうしたら、今度は、名前もついでにかへるのだな。部下を指揮するのにも、その方が張合があるだらう。南明哲が指揮するのでは、指揮される方が、かへつてまごつくといふもんだ。」

日本語の常用と内鮮結婚につづき、創氏改名という順序が自ずと提示されている。内鮮恋愛においてはなによりも日本語が前提とされ、日本語によって内鮮恋愛と結婚が担保されるのである。そこに朝鮮語は介在しない。内鮮結婚と内鮮恋愛は朝鮮人が日本語を獲得していく行為と連動しているのである。そのため、内鮮恋愛のためには朝鮮人の日本語力が盛んに問われる。

たとえば、「恵蓮物語」での主人公は無学の妻に日本語を覚えさせるため、家庭内でも主人公は女房にわざと日本語で話しかける。それに妻の恵蓮は辟易するが、夫はますます熱心になる一方で、わざと日本人街に引っ越して妻のところに日本人の小使を送ったりする。日本語に異常な執着をみせるのである。あげくの果てには、日本語勉強のために妻をカフェに就職させ、夫は客を装って訪ねて日本語を教える。

奎澤はミソノへ来ると必ず一度は恵蓮を呼んで言葉を試みた。
「内地語はむつかしいとおもひますか。」
「いいえ、そんなにむづかしいとはおもひません。」
「お友達のなかでは誰が一番お好きですか。」
「虹子ねえさんが一番お好きです。」
「いや、好きです。」
「はい、好きです。」
「朝は何時に起きますか。」
「ジュウジにおきます。」
「ねむたくありませんか。」
「イイエ。」
「たべものは、何が一番お好きですか。」
「ライスカレーが一番お好きです。」
「いや。——」
「はい、好きです。」
「さう。——では、今度はアクセントの練習をしませうね。アクセントといふのは、つまり言葉の抑揚のことです。上げ下げのこと。——」

すでに指摘したように、「恵蓮物語」では内鮮結婚の擬似体験のために朝鮮人妻を日本女性として教育しているが、その方法が妻への日本語教育である。こうした日本語への異常なほどの情熱は「天上物語」でも露骨に現れている。

「天上物語」での〈私〉は、親の意向によって強制的に無学な女性と結婚する。しかし、妻の無学を恥ずかしく思った〈私〉は妻に日本語による生活を強要する。〈私〉はわざと日本的な生活を取り入れるが、妻はそれに強く反発し、口論が絶えない。

「お前は、俺が一生涯鉄道員で終ることをのぞんでゐるらしいが、しかし、俺が若し鉄道員で終るとすれば、どうしても試験をうけて昇進しなければならないだらう。さうすると俺たちは内地人と一緒に官舎住ひをしなければならない必要が生じてくる。お前も当然、内地語を話して貰はなければならない。お前にそれをするだけの能力がないことは既に試験ずみだ。それでもお前は俺に一生涯鉄道員生活をしてゐて欲しいと思ふのか」
すると妻は曖昧に笑ひながらいつた。
「さうですわ。他に出来る仕事があなたには何もないのですもの。——

試験をうけて昇進なさるお気持があれば、それはわたしだつて一生懸命言葉ぐらゐ習ひますわよ。だけれどあなたにははじめつからそのお気持がないのですわ。ですからわたしも張合がないのですわ」

日本的な生活に対する妻の反発にもかかわらず、〈私〉は一方的に日本語による生活に傾斜していく。日本女性との交際にも積極的になっていく。また〈私〉は日本の女流詩人から日本語で書くように勧められ、日本語創作が鉄道機関誌に一等作として選ばれる。受賞作のなかでは、妻は教育を受けたインテリに設定され、〈私〉と妻との毎日の会話は「国語で行はれてゐる」ことになっている。また〈私〉の受賞作は、審査後記で「朝鮮人が国語をもつて小説を書くことは不自然である筈なのにかういふ現象に対して選者は理解することが出来ない。これは翻訳された国語ではなくして国語そのままである」と、日本語能力が賞賛される。日本語に対する果てしない情熱のあらわれであろう。

一方で、作家によるこうした文学言説中の日本女性と日本語への欲望は、しばしば、作者自身それに対する欲望と密接につながっている。戦後、日本に根拠を移した金聖珉がそうであり、また朝鮮人として初めて日本文壇で活躍した張赫宙がそうである。日本女性と日本語への欲望によって朝鮮を離れていくディアスポラの内面心理は張赫宙の作品によく表れている。戦後の一連の自伝的な作品『遍歴の調書』(一九五一年)「異俗の夫」(一九五八年)『嵐の詩』(一九七五年)では、朝鮮人妻と離婚して日本女性と再婚した主人公が、ますます日本語の世界に接近していく過程が描かれている。しかし、日本語への接近によって今度は朝鮮的な特徴を失い、作家としては衰退していくことになるが、もう後戻りはできない。『嵐の詩』では日本女性との結婚によって朝鮮的なものから離反していく次のような象徴的な場面がある。

愛はきッと龍に眼をやって、
「よろしいのね？」
「……」
龍は頷いた。
二人は昇殿を許された。龍は心の目を閉じて何も考えまいとした。それは真珠の声がその心にひびいて来そうだったからである。奥のほうに御簾が垂れ、神官はそちらへ向いて拝礼とかしわ手をくりかえした。そして、やおら二人の前に膝行してきて、御幣をふり、拝礼をして、それから祝詞を読んだ。祝詞の中に龍は自分の名を聞き、その誓いへ次第に心が動いていった。

これが定めだったのか？　龍は真珠が雲の上へ遠ざかりそのひとが背負っている山や川も姿をかくすのを見た。

神殿の前で日本女性の愛と結婚を誓うことにより、朝鮮女性の真珠の存在はもちろんのこと、真珠の背景にある山（朝鮮の）も川（朝鮮の）も姿をかくしていったのである。そして最終的に主人公は「ぼくはこの国の人になる」と決心するにいたる。内鮮結婚と同時に内面のディアスポラが開始され、日本語への傾斜が深化し、さらに二世の誕生によってディアスポラの心情は一層確実なことになっていくのである。そうした心理的な過程を張赫宙の戦後の自伝的作品はよく物語っている。その点、内鮮恋愛・内鮮結婚はいつも宗主国に還元されるもので、被植民地に還元されるものではないといえる。そしてそうした欲望の中に朝鮮人ディアスポラの内面心理が胚胎されているといえる。もちろん、それはたんに朝鮮人ディアスポラに限る問題ではなく、植民地と宗主国における普遍的な性質のものでもあろう。

4．終わりに

以上、朝鮮人の内鮮結婚・内鮮恋愛と日本語への欲望を取り上げたが、そうした欲望は終局的には朝鮮側に収斂するものではなく、日本側に還元されるものであることを指摘した。朝鮮人ディアスポラの現象にはこうした内面心理が大きく関係しているのである。それはたんに皇民化や同化政策が声高に叫ばれた植民地期だけに限る現象ではない。戦後にも植民地文化構造は依然として続き、それが戦後的な文化現象として新たなディアスポラの内面心理を形成していくのである。日韓における朝鮮人のディアスポラ現象にはこうした植民地的な文化構造と深く関連している。それが戦後的な、いわゆる新植民地主義を形成し、新たなディアスポラの内面心理を創出し、強化していくのである。皮千得「因縁」がそうであり、金城一紀『ＧＯ』とその膨大な類似作品がまたそうである。そこには日韓男女による幻想的な内面心理が国際恋愛と国際結婚という戦後的な名前で紡ぎだされているのである。そうした枠組みの中でも日本語への欲望は依然として確保され、新たなディアスポラの内面心理を強めていくのである。そしてなによりもこうしたディアスポラの心理構造は帝国と植民地における普遍的な現象であるように思われる。

＊本論文は以下の拙論を参考にしたものである。

南富鎮「朝鮮の作家と日本語」(『昭和文学研究』四二集、二〇〇一年三月)
――「内鮮結婚の文学」(『近代文学の〈朝鮮〉体験』勉誠出版、二〇〇二年、所収)
――「なぜ日本語で書くのか」(『〈翻訳〉の圏域――文化・植民地・アイデンティティ』
筑波大学文化批評研究会編、二〇〇四年二月)
――「内鮮結婚の文学――張赫宙の日本語作品を中心に――」(『人文論集』静岡大学人文学部紀要、二〇〇四年七月)
――「日本女性と日本語に向かう欲望―金聖珉の日本語小説を軸にして――」(『人文論集』静岡大学人文学部紀要、二〇〇五年一月)

Abstract

日本と韓国・朝鮮の間には戦前から内鮮結婚・内鮮恋愛の言説が多い。それは日韓の国際結婚という形で戦後の今日まで続いている。朝鮮人と日本人との恋愛と結婚は、幻想的または浪漫的なストーリとして教科書・小説・映画・ドラマなどで繰り返し反復されてきた歴史的なテーマである。そして内鮮恋愛と内鮮結婚の問題には、いつも日本語が介在し、その方向は必ずといっていいほど日本側に収赦していく。内鮮恋愛・内鮮結婚によって日本語が確保され、終局的には朝鮮人が日本側に接近していくディアスポラの内面心理を胚胎するのである。そしてこうしたディアスポラの内面構造は、日韓の間だけではなく、帝国と植民地における普遍的な現象でもある。